

NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会

公開研究会

2019年6月24日（月）午後6時

桜木町市民活動支援センターセミナールーム2号

講師：南学（当 NPO 法人正会員）

テーマ：政治家市長と官僚 OB 市長

Aー きょうはNPO、定例の公開研究会ということで南学さんをお願いいたしました。タイトルとして『政治家市長と官僚 OB 市長』ということで、なかなか難しい題が付いてますが、『権力行使とまちづくりの接点』ということでお話をいただきます。ただいろんな議論がある話題になってくと思うので、ぜひ質疑応答、あるいはそれぞれの皆さんのご意見を自由闊達にお聞かせいただきたいと思います。

南 物々しいタイトルにしたので、どこまで話せるかなと思いますけれども。地方公務員として1977年に横浜市役所に入って、1999年12月31日に退職をし、23年、勤めましたが、その間、多分、地方公務員としてはかなり稀有な体験をしたと思いますのでその辺をお話したいと思います。

地方自治体は大統領制なので、その地域に関しては内閣総理大臣よりも、権限が強いつて言われます。要するに地域の決定権っていうのは、予算と人事を完全に自分でコントロールできるので、議院内閣制とは違います。与党、野党って言いますが、国は与党が総理大臣を出すので、反対勢力は野党です。ところが地方の場合は大統領制なので与党、野党という区別が果たしていいのかどうか。しかも地方の権限からいうと政策的な選択の幅っていうのは、国はものすごく大きいですが、地方の場合にはやはりその枠内でやるので、私の感覚で言うと与党、野党の対立式というよりも、二元代表制の執行機関とチェック機関というような関係のほうが大きいし、そうあるべきだと思います。

ただその中でも首長さんはものすごく権限が強いので、私が見た限りにおいて、異論があるかもしれませんが、少なくとも地方ではおさまらずに、自分が首長になった地域の外に、つまり日本全国に対して権力の意欲を持つ方は首長を2期ぐらいしか続けないというのが私の見方です。これに対して、上がりポストの人、つまりこれから言う官僚OBのかたがたっていうのはもう上がり、官僚で上がったので、あとは一番、住み心地のいいその地域で、いつまでもその権力の座にしがみつくといいのがあると思います。それは長洲さん（神奈川県知事）とか、平松さん（大分県知事）とかですね。長洲さんは官僚ではなく学者ですが、5期、続けたました。6期目までやろうとして、いろいろ挑戦に失敗して結局、辞めたんですけども、さらに続けようと思った。平松さんも7期ですね。一村一品で有名になって、とにかく続けた。

あと今、秋田県知事ですね、8期だったか。そんなことで上がりポストの人って、いつまでもやる。後で言いますけど、細郷さんも高秀さんも最後までやろうと思ったし、特に細郷さんは体ガタガタだったのに「次がサミットの誘致だ」とか言って、最後の最後まで絶対に辞めるとは言わなかった。

それから次を目指すっていう人は、一番、典型的だったのは北川さんという、衆議院議員から三重県知事になって SHARP の誘致だとかいろんなことを、行政改革をやりましたけど、この人は2期で辞めています。あれだけの実績がありながら。1回、会っていろいろ話をしたのですが、眼光鋭いとか次を絶対、狙ってたと思うのです、多分。でも、情勢の読み間違えて、国政に復帰できるタイミングを逃して、早稲田大学の教授で終わろうとしてるといふか、そんなようなところで。私自身の考え方ですけども、政治家市長と官僚OBの違いってのはあるのじゃないか。

飛鳥田市長と田村さんの組合せで、横浜の戦略プランをつくって実践した、という成果をみると、野心があり、決断のできる政治家と総合プロデューズができるプランナーの組合せです。官僚OBの市長は、能力的にも人脈（ネットワーク）にも優れていて、一人でプランも決断もできるのですが、自信に満ちあふれているので、行政主導、といふか自分主導で、市民との接点は啓蒙的な観点が主となる。そして、いつまでも続けたいと思う。

理想は、自分のまちに対する理想、ビジョンを実現しようという野心と、専門家としてのプランナーの力を発揮できる環境を整えるという懐の深さの組合せです。そのあたりを、田村さんとの接点、高秀さんとの接点が、中田宏との接点が大きかったので、振り返りたいと思います。

まず最初に横浜市との接点なのですが、実は、中学、高校ぐらいのとき、確かな記憶はないのですが、まだプールがあんまりない時代で、当時、私は三ツ沢の競技場のすぐ横に住んでたものですから、プールがなくてつまらないなと思って、『市長への手紙』って当時あったので、ここにもプールを作っていただきたい、ここはスポーツの殿堂としていろんなものが全部そろってる所です、プールだけがありませんっていう手紙を出したのです。そしたら半年でしたけどもちゃんと手紙が返ってきて、もちろん官僚が書いたよう文章ですけど、これ、返事が来たっていうのはすごく感激をしたという記憶があります。そしたら『市長の手紙の会』というのが催されて、要するに当時の飛鳥田市政を支えるかたがたの集まりの場なのですが、何も知らない高校生の私はそこに行って、直接、市民の要望に市長がその場できちんとした明確な答えを出すという、これも感激をして、すごいなあとと思ったのが横浜市政に対する一つの接点ですね。

でもその後2回目に『市長の手紙の会』に行ったときは、横須賀線を通すために貨物線を市内に通したことへの反対運動の市民グループが来ていたのですが、そこを押さえ付けるような感じでした。一方で、あまりにも見え透いた市長を支持する質問などがあって、さすがに私も最初に聞いたときから2年ぐらいたって、高校の終わり頃にはこれは出来レースだな、演出しているな、というのが見えてきました。そんなようなところで横浜に接点を持つ

て、結局、横浜市役所に勤めることになりました。

就職した時、当時は1カ月も新人研修がありまして、まだ飛鳥田市政が続いていたときなので、六大事業や宅開要綱など、さまざまな横浜の代表的な取り組みを研修で紹介されるわけです。市の職員がすごいことやったんだなあと、非常に感激をしました。1カ月の研修が終わったとき、そのとき大学卒が120人いたのですが、最後の集まりのときに研修所の係長の人にマイクを使わせていただいて、「研修だけでは十分に勉強できていないので、『都市問題を考える会』作りませんか」と、同期の人に呼び掛けたっていうのが『まち研』の母体になったっていうところですね。

そこで、まず手を挙げたのが60人、半分、挙げたのですが、1カ月後に集まったら10人程度しか集まらなかった。ただ名前の登録は60人ぐらいあったので、ちょっと見ていただければと思うのですが。もうこれ、40年前なのですけどね。都市問題を考える会のニューズレターをつくって、青焼きのコピーで毎回、皆さんに庁内メールで送りました。記録がたまたまあったので、お見せしますが、今から見ると赤面の至りですが、そのような活動をやったというところです。

この活動で、田村さんとの接点が非常に大きくなりました。なぜならば、今から考えれば田村さんが辞めるときに自分の遺伝子をどう残すかということで、まちづくり研究会の設置と、それからプランナーズ協会だとか、いろんな構成メンバーで幾つかの研究会を仕掛けていったのです。まちづくり研究会ですが、具体的には田村さんが、職員研修所のスタッフに働きかけて、技術講座っていう4回か5回の講座をやったのです、市の職員向けに。そのときに田村さんが「南君、最終回に、この研修を継続的に研究会にするように呼びかけて」と声をかけてきました。参加者が20人か30人いたのですが、「私（田村さん）は10分間ぐらい遅れて行くから、その間にみんなに話をして会の設立っていうのを呼び掛けてくれなにか」というようなことになりました。そのとき、私は『都市問題を考える会』を運営していたので、合体すればいいかなと考え、「まちづくり研究会」として、再出発をしました。

遠藤 （それは細郷市政になってから）、2年目ぐらい？

南 2年目かな。田村さん、いつ辞めましたかね。

A- 80年。

A- 81年か。

遠藤 南さんが2年目のときに、考える会が『まち研』に。

南 田村さんの講座を受けて『まちづくり研究会』に変えて、より広い人たちに呼び掛けて

研究会にしたというところです。

南 その職員研修の前に、田村さんとは接点がありました。それは、田村さんがつくった東大の出身者による『银杏会』という懇親会です。これは田村さんがつくったと言っていました。その目的は、世代をまたがった交流の場っていうのがなくて、大学の同窓会っていうのはその世代間の交流という点で一番いいということです。それを田村さんが横浜市に来たときにつくったということです。

遠藤 学閥じゃないんだ。

南 学閥じゃ全然ないですよ。1年に1回だけですけど、懇親会です。だから学閥という日常的な接点が全然なくて、年に1回、集まるだけ。それが、田村さんがつくったということですね。

当時はメンバーがすごかったです。助役がいて、局長がいて。私、入ってから確か10日目ぐらいに案内が来て、何だろう、うさんくさいなと思ったのですが。でも出席してびっくりしました。入ったばかりの職員ですから、局長さんに会う、まさか助役に会うなんてことは絶対ないわけで、その方々が目の前にいるわけですよ。そしたら田村さんがやっぱり遅れて入ってきて、みんなが拍手で迎えていました、設立者として、もっとも影響の大きい方として。

そのときに特に印象に残ったのは、多分三十人以上参加していたと思うのですが、全員と一人一人と座を巡って、田村さんが動いてみんなと話をしたことでした。私たちは新人で4人ぐらいでしたが、田村さんは、一人一人に話しかけてきてくれました。名前を聞かれて、「南学です」と答えたとき、「はあ、南君。ナンガク君か、ははは」と言ったのはいまでも覚えています。いろいろ話をしたんですね。私は内容を覚えてないですけど。2次会に半分ぐらいの人が参加して、そこにも参加しました。そのときに田村さんは、また、皆さんと話をしますが、そのときびっくりしたのが1次会で会ったときに話したことを、名前も、「ナンガク君か」といいながら、話した内容までも、「あのときこう言ったんだけどね」と、続きを話してくれて、びっくりしましたね。なるほど、田村さんは、宴席でも積極的にその機会を活用する方なのだなど、すごさとともに、非常に親しみを覚えました。新人の私が何の抵抗も感じなかったのです。

新採用職員研修の時に戻りますが、継続的な勉強会を呼び掛けたことで、研修所の係長が、研修所外で行政問題自主研究という制度を始めて、自主研究にも若干の予算をつけ、勤務時間中に半日単位で2日ほど研修の時間をとることを認める、勤務時間内にですね、そういう制度をつくったので、応募したらどうだと助言してくれました。なので、その第1号として『都市問題を考える会』の名称で応募し、ほんの少々の活動をはじめました。そのとき

にたまたま企画調整局に東大の先輩、横浜美術館の計画を立てた方ですが、高橋敏美さんという方ですけど、その人といろいろ話をする機会ができました。非常に変わった方でしたが、その方を呼んで、当時、中期政策プラン、5カ年指標とかいったかな、ちょうど発表になったのでそのレクチャーをお願いしました。そのついでに「田村さんにお話をお願いできませんかね」と相談したら、「じゃあ俺が紹介してやるよ」ということで、その勉強会に田村さんが1回、来てくれました。このような体験が、就職後の2、3ヶ月の間にありましたから、田村さんは、勉強会に気楽にきてくれるのだ、思い、その後も気楽に声をかけさせていただきました。

当時は、「田村天皇」という言葉を知らなかった頃でしたから、局長室にちょっと行ってみたりだとか。役所のヒエラルキーを無視して、田村さんって親しくしゃべれる人なんだと思って、部屋に何度か訪ねたこともあったということで、多分その辺から南は変な野郎だっというのが広がったのかもしれない。

このような経過で、『まちづくり研究会』は結局、20年は続いたのです。少なくとも15年間は毎月1回の勉強会を開催し、大体20~30人が参加しました。横浜市役所の課長さん、ないしは係長さんと呼んで話を聞いて、1時間のレクチャー、あと1時間のディスカッションをやって、最後のまとめを10分から15分ぐらい、田村さんが大変な早口でその回のテーマになった事業について、大所高所から解説をしてくれました。その後、中華街など2次会に行って、講師の方も含めてですから、今度は酒の席の中で裏話をいろいろ聞き、さらに事業の裏表を含めた課題に関する内容を深めることができました。このような密度の高い勉強を、一月1回で年間12回、15年以上ですから、合計で200回以上は行ったと思います。その15年以上、誰を呼んでどういう話にするかとか、会場の取り方とか田村さんの日程調整など、事務局の仕事全部やったので、私にとってみると個別の話は覚えていませんが、肌で市役所のいろんな仕事を裏話まで含めて聞いたっていうのは、200ぐらいのケーススタディーになります。相当大きな財産になりました。これが今、私の一番の最大の財産だと思っています。行政関係であれば、どのようなケースも大体のことが分かっちゃうと。

月々の例会のほかに、合宿で、大分の一村一品の視察に行ったり、上海のまちづくりだとか、香港だとかいろんな所に行きました。そんなようなところも非常に面白かったし、合宿に行くと田村さんが1人でとにかく町の中をグルグル歩くのと、夜は飲み会をやりと午前の3時ぐらいまで田村さんが最後まで残って、朝は一番、遅く、朝食には来ないで寝ていたという、なかなか面白いことも体験しました。

飛鳥田市長が当時の社会党の委員長になるということで、辞職し、その後の市長選挙で細郷道一（1915/1990）さんが誕生してからは大変なことになりました。細郷さんは自治省の事務次官を退職し、横浜駅の東口開発公社の理事長になったのですが、その細郷さんの首を切ったのは田村さんだと言われて言いました。だからこれは何か起こるに違いないと噂があったのですが、田村さんは最初の人事で、企画調整局長を外されて、技監という肩書きが残

りました。技監として残ったんだなと思ったら、技監の事務分掌がガラッと変わって調査研究になってしまいました。その前の技監は技術系のトップということと人事に関することもあった。いろいろ聞くと飛鳥田市政の人事の決定の場所に田村さんが「ホテルの一室で、誰がメンバーっていうのは分かんないんだけど、僕は行ったんだよ」って話で、「みんなが嫌な顔をするけど人事を話し合う、幹部が集まっているホテルの一室に、わざわざ行ってそこにいろいろ口出しをした」と言っていました。

だから技監というポジションは技術系の人事にも関与していたので、これは多分、当然、外されるだろう。ということで都市科学研究室長も兼務ということで技監として閑職に追いやられた。でも技監室には、課長、係長とスタッフが何人か配置されているようなところで、一応、独立した部屋にいらっしゃいました。私も何度かそこに訪ねて行って、いろいろ勉強会を開催したりしました。

私が入ってから10カ月後に飛鳥田さんがいなくなって、細郷さんが当選したので、わずか10カ月の企画調整局長だった田村さんとの付き合いだった。接点もほとんどないのですが、細郷さんは官僚上がりで田村さんを切った方と思ってました。でもいろいろ考えてみれば官僚OBとして、自治省の事務次官まで務めた人ですから、人脈その他を駆使して。高秀さんもそうなのですが、やっぱり官僚のOB、特に中央省庁の事務次官をやった人はすごい人脈と、いろんな意味での事業構想やプランニングができたのだなと思ったというところです。

ここの『細郷市長との接点』の中で、『银杏会』で出会ったときに、これは非常に面白かったのですが、立場が人をつくるっていうのがよく分かりました。確か中曽根康弘さんが首相になったとき、「首相らしくなるには3カ月かかった」って、どなたか評論家が言ってたんですね。どんな権力者であっても、あの首相の座に座るっていうのは、最初はぎこちないが、しばらくすると自然と座ってそこになじむ。要するに権力行使その他に慣れるには3カ月はかかんだろうというような話があった。細郷さんを見たときにそうだというふうに思ったのです。

というのは、細郷さんは東大出身なので『银杏会』に来て、まず最初にちゃんとあいさつをするんです。もちろん市長ですから皆さん、お迎えして。そのとき、最初のあいさつは、いかにも官僚というのか普通の人で、前に立って両手を合わせながら、「実は私が今度、市長になりまして」なんて感じで普通の、いわゆる官僚的なしゃべり方をしてたのです。これが1年たってみたら何が起こったかっていうと、もう市長ですから、やあやあという感じで、「ここに市民はいるのかね」とかっていう話で何人かパッと手、挙げて、「なんだ、投票権、持ってないのもいるのか」と。すごいな、政治家になっちゃうんだなというのを実感しました。

そんな中でたまたま、細郷さんが亡くなる直前ですけども、1990年に亡くなったのですが、その半年前ぐらいに日米市長会議がロサンゼルス市で開かれました。そのときにたまたま私は留学の第1期生としてロサンゼルスに留学をしていたものですから、国際室から

頼まれて「少し市長のアテンドをやってくれ」と言われてですね。資料などをおまへの住所に送るから、それを会場で配れとか、雑用を仰せつかり、それから「市長の移動のときの車の手配をやってくれ」と言われました。そんなようなことをやったおかげで3日間、市長と一緒に過ごしたとき、これ、面白い体験をしましたね。

南 車に、市長と通訳と秘書と私と4人ぐらいで、移動するのです。市内の視察もありました。お昼ご飯、一緒に食べたりだとか。でもそのときにもうかなり体が悪かったのです。まだ、少し歩けた状態でしたけども、手に持ってたのは健康に関する本で、「世の中の健康っていうのはみんな間違ってるって書いてあるよ」とわれわれに話した。それから当たり障りのないことを言いながらも、私もまだ野心を持ってましたから、市長に、「横浜に国際的な、いろんなレベルの高い人の集まりをライブラリみたいにつくりたいんですけどね」とか売り込みし、「面白そうだね、研究したまえ」とかって言われました。

その中で印象に残ったのはこのロサンゼルスで「何と言っても課題は、次のサミットを横浜に誘致することだ」と言っていたことです。サミットは東京で開催されて、その後、東京を離れたのは沖縄での開催でしたけども、多分その3回目か4回目のサミットが東京で開催されるときに横浜で開催したいと。諸外国、先進国サミットでは、日本以外の国は全部、会場が変わるんですよ、同じ国でも。日本だけが東京なのですね。なので、東京以外に変えるっていう議論は常にされてた。そのときに多分、細郷さんは横浜に誘致すると。これは当然、みなとみらい開発だとか国際会議場だとか、まだできてませんけども、93年の開催だったか、そんなようなところを考えると、もうほとんど体力的には限界になってたんですけど、「それが一番の課題だ」と言ってた。

5月に市長とロサンゼルスで会って7月ですね。夏休みに一時帰国して報告といろいろなことで行って、市長にもロサンゼルスで会ったということで秘書課も時間を取ってくれて市長にちょっとあいさつ、2分間ぐらいでしたけど会いました。ちょうど市長が市長室から出るときに会ったら、歩くのがもうやっとなのですね。ブリーフケースも秘書が持ってる。随分、衰えたなあという印象だったのですが、それから半年後、亡くなったというお話をロサンゼルスで聞きました。私の印象は、最後の最後まで権力の座の中で、横浜にサミットを誘致したい、これが私のライフワークだというようなことを考えてたんじゃないかなと。

次は高秀秀信（1929/2002）さんとの接点です。

2期目になって、高秀さんが考えたのは、自分が庁内で評判、悪いっていうのも聞こえてきた。庁内では、あの人は全く課長補佐みたいなこと言うなあ、市長っていうのは大所高所で言ってくれなきゃ困るよ、全くあんな所で言われたんじゃないと二度とそんな説明にも行きたくないとか、幹部の中にはもう本当に高秀嫌いがいっぱいいて、どうせあの人は1期で辞めんじゃないのか、辞めてほしいよっていうのがまん延してた。そんなこともあって権力基盤が全然、固まらないうちに2期目を迎えたのですね。

当時、神奈川県長官の長洲知事が知事室の中に調査班だったかな、ある理事がいて、その人がまとめ役になって5人の調査班をおいていた。5人のスタッフで。それを高秀さんが聞いたらしくて、そういうグループつくりたい。つまり市長の、いろんなこと政策で話すときの受け皿になる、それから原稿を書いてくれる、あるいは特命事項でいろんなことを調べる。そんなものを「つくりたい」と。そこに、たまたま課長として呼ばれたのです。秘書課のなかに、5人の「調査等担当」という職員配置がなされたのです。

高秀さんとこの5人が2週間に一遍集まって、市長と1時間の時間で話をする。最初、市長のほうも何やっていいか分かんないっていうようなことがあったのですが、徐々に話の接点が出てきて、1時間、話したのをわれわれ、懸命にメモをしながらうなずきで、『うなずきブラザーズ』って名前を付けてですね。部屋を与えられて、ホワイトボードに市長、何、言ったっていうのを書いて議論するわけですね。こんな本、読んだとか、このテレビを見たとか、誰と話したって全部、裏を取って、一体全体、何を言おうとしているのだったっていうのをまとめたのです。たくさん集まった資料をA4版1枚にまとめ、次の2週間後の会のときに、説明する。市長はパッと見て、1分もたたないうちからああでもない、これがいいの悪いの、もっとこれを調べろとか、これは違うからやれとか。そんなのを繰り返してうちに市長の頭の中がすっきりするのですかね。なるほど、後で見たらそれはコーチングの技術だっていうのが分かったのですが。市長がニューヨークで、国連で演説するからその原稿を書けとか、そんなことも含めていろんな仕事をやったっていうのは、高秀市政のときの面白かったことですね。

ただそれでも権力基盤はなかなか確立しなかった。て劇的だったと思うのは阪神淡路大震災。あのときに高秀さんがテレビを見てすぐに集まれと5人を集めました。「今まで議論したけど、きょうは全部、俺のしゃべることをメモしろ」っていうのですね。

建設省時代に伊勢湾台風とか、新潟沖地震とか災害対策でやったもんですから好きなんですよ、災害対策が。大好きって言い方、悪いな。本当にそれを真剣にやった人なので、思い付いたこと全部言うわけで、メモにしました。こちらもすごい緊張感を持って1時間どころか2時間近く時間をかけて、それでその項目をまた「すぐにまとめろ」っていうのでかなり集中して、どういう項目でどういう問題があるかっていうのでザーッと書き出して、四十数項目の提言っていうのをまとめました。

だけどそれをまとめちゃうとまた各部局に全部、配分されるだけの話で、どういうふうにしたらいいかねっていうのをまた議論しているうちに、時間軸で分けようっていうので、緊急対応でやるもの、1カ月以内でやるもの、半年以内でやるもの、中長期のプランでやるものっていうふうに、時間軸で分けたらすごくすっきりしたんですね。それを市長に言ったらこれでやるぞっていう話になって、当然のことながら意見交換して、精査をしました。その後「部局長、全部、呼べ」って。初めてだと思いますけど局長さんと区長さんが全部、一堂に四十数人が集まって、そこにわれわれのつくった、市長の指示に従った災害対策のプランを提示して「どうだ」っていうと、小中学校、避難所でどうのこうのという意見が教育委員

会から出たとか、うちの部局ではこれはできるの、できないのって、初めて局長さんと区長さんが市長に向かってちゃんと意見を言うわけですね。市長もそれを聞いて「これはできないのか」など、議論がかみ合い始めるのです。それ以来、廊下の雰囲気が変わったって感じでしたね。それまでは普通に歩いていたのが、市長室を通る人たちの足が速くなったっていうか、緊張感が出てきたんですね。なるほど、これが権力の集中っていう感じかなあと。今から思えばですけども、そんなようなことを感じたっていうところでした。

3期目になってから変わったなと思うのは、人事が停滞するっていうか、長の好みはこうだとか、人事はこうなりそうだっていう話ばかりで、政策をどうするっていうよりも市長の顔を立てるほうが会話としては多くなったし、それに対して市長のほうもいろんな意味で大丈夫なのとかという案件が幾つか出てくる。

自分のことを考えると、係長試験は1回で受かったし、課長にも同期の120人中3人ぐらいで先になっちゃいましたし、もうあと1、2年で部長になったり、多分そのペースで行けば局長にもなれたのでしょけれど。でも、議会対策にかなりの時間をとられるようになるし、時間は自由にならなくなるし、縛られることが多くなるなど考え始めました。たまたま大学の教育や経営のことを勉強していたので、大学の教員への転職を考えました。

そしたら、高秀さんにそれで決まったっていうことで話をしたら、やっぱり自分のせつかく世話をした人間が自分の所を去るっていうのは、ちょっと気分、悪いみたいですね。ですから新設大学で、2000年の4月オープンなのですけど、「おまえは辞めんだったらさっさと辞めたほうがいいぞ」と言われまして、準備活動っていうとこできちとやったほうがスムーズに移行できることを理由に、去る者は去れというような形で言われたっていうのも非常に印象に残ってますね。

そのような事情もあったのでしょ、中田宏（1964-）と初めて会ったときにはすごく新鮮な印象でしたね。当時37歳で、背が高くて弁舌爽やかで、国会議員をそれでも9年やっていたという。やっぱりしゃべる世界が違うわけですから、あれ、このエネルギーは市政を変えることになるのかなと誤解をしたっていうか、託すような気持ちになった。

B-1 錯覚した。

南 そう、錯覚した。そこが運命の分かれ道でして。細かく言うと、今でも覚えてますが2001年の11月3日なのですが、友人の紹介で中田に会わされた。それまでは中田宏っていうのはよく知らなかったのですが、初めて会って、そのときは市長選挙に出る、出ないって話は全然なかったですね。だけど市政はどうなってんのと話を聞いてきました。

そしたらその友人から1週間後に、私に電話かかってきて「ちょっと会いたい」っていうのでその話かなあと行って行ったら、「断らないでね」っていうんで「何？」って行ったら、「中田がどうも横浜市長選挙に出たいっていうことらしい」と、「ついてはそれを手伝ってくれない？」っていう。手伝いというのは、要するに事務所である程度の政策だとか、アド

バイザー的に。その日のうちに、中華街に連れて行かれ、いろんな関係でその側近の人たちに何人かに会った。そしたら翌々日に、わが家に花束を届けに中田本人が来た。

そして、近所の喫茶店に入ったら、「実は出ることにして」と。

B－ 蘭だった？

南 「奥さま用に」って言ってたからバラだったかな。

B－ バラか。

南 多分、バラだったと思います。そんなようなところで話が始まって。出ようとは思うのだけど、だけど彼は国政に対しても未練があったのでしょう。小泉純一郎と鳩山由紀夫の間を取り持って新党結成ってというのが彼の目標だったらしくて、鳩山由紀夫からの伝言だよなんて、留守番電話を聞かせてもらったりとか、いろんなことを教えてもらいました。

だけどちょうど小泉純一郎が、郵政選挙の前ですから最初の人気、ちょっとかげりがあるって、田中真紀子事件が起こって、鈴木宗男との関係で。ちょうどその頃で、支持率が確か40パーセントぐらいに下がったときなのです。中田は多分、私の感じですけど、これでちょっと国政はしばらく駄目だと思ったので、横浜市政で名を売ってというか、実績を残すってことに決意を固めたのが、多分2001年の年末のあたりだと思いますね。もちろん、それ以前から準備はしていましたけど。

彼は『夕刊フジ』だったか『日刊ゲンダイ』だったか忘れましたが、多分リークしたのでしょうね。初めて横浜市長選挙に中田が出るっていうのは夕刊紙で報道になったのです。小泉対石原の代理戦争で、高秀対中田だったかな、そんなような図式を作って。彼はそんなことを、その後ですぐ会ったら「そんな記事、出たの？ すぐ買い集めてよ」なんて私に言ったんですけど、それ、うそで、自分が全部、演出してた。後で考えりゃ当たり前なんですけど。

そして、2月の終わりですけども正式に出馬表明を横浜市役所でやりますということで、そのときの資料は全部、友人その他2、3人でまとめたのです。そしたら最後に中田が、「南さん、名前を貸してよ」と。これは本当にばかなことをやったなと思いますけども、でもここまで来てしようがないなって、断るに断れなかった。「私の名前だけじゃしようがないから、アドバイザーグループ5人ぐらいの名前を並べてよね」といったのですが、記者発表して私の名前、見つけた途端に市役所中が大変なことになったというところで、多分、遠藤さん辺りはよく覚えてらっしゃるんじゃないかと思うんですけど。

彼は、政治家なのでキャンペーンがうまかったですね。『5兆円の借金』とかキーワード前面に出して、2週間のうちに「高齢多選の是非を巡って」という市長選挙の争点が「多額の借金と行政改革を争点にする」とNHKが言い出したぐらいに、2週間で争点が変わってし

まった。これは、中田の戦術がうまくいったという感じはしますね。だからいまだに現職に挑む首長さんとか政治家に私は「挑戦者は一点突破だよ」とアドバイスすることもあります。中田の選挙を見ていてそう思ったっていうようなことがありまして。

Bー ここからは途中で質問する形式で話したほうがいいんじゃない？

南 そのほうがいいですね。じゃあここからは。

Cー しょうがないから俺から言おう。

南 一番、怖い質問です。

Cー 中田さんはキャンペーンの話で、行政改革の話は誰がやったって話題になっていた。財政事情のキャンペーン、これは南か。

南 選挙のときに、中田から「隠れ借金はないの？」と聞かれたので、「ないけど、下水や交通など企業会計の地方債残高、これは投資で借金ではないけれど、それを加えると、5兆円弱の地方債残高になる」と答えた。そしたら、中田は「それだ！」とキャンペーンに使った。選挙期間中に、「5兆円の借金といっても、投資なので、回収できる部分もあると反論されるよ」と言ったら、「選挙はキャンペーンなんだから、これで行く」と言っていた。

Cー (中田を) 抑え込もうっていう形で、はっきり言って俺らのときやってたけどさ。やってたにもかかわらず、このキャンペーンはもう一方的に高秀をそこから攻めてったわけ。だから行政(財政)を知ってる側からすれば、誰がこういう暴言のキャンペーンを始めたんだっていうね。それをあえて、すごい論理的に書いてくるわけよ。改革の話と隠れ財源。そんなのはだから、こう言っちゃあれだけど、しっかりと全部、分かっているな。それをあえて市民向けのキャンペーン。だからこれは相当の裏切り行為になる。キャンペーン自体がね、役所側からすると。知ってて、あえてやった。実際、風向き変わっちゃったから、本当、僅差で終わっちゃったんだけど。俺らからすれば、あのときはもう既に高秀さんもちょっと体調、悪かったんじゃない？ そんで結局、受かってもワールドカップまでだなと。

南 その花道論もありましたよね。

Cー そう。だからどちらにしろ、これは細郷さんとはちょっと違うのだけれど、高秀さんの周りの人、みんな知ってたのね。無理なくていいんじゃないの。だから、それこそ自分の後継者がすればいいんじゃないのっていう話を、周りはしてたんだけれども。やり切りた

いって、ワールドカップのために競技場も造ったし、みなとみらいもやってきたし、というそのハードに対する一つの完成形までやるつもりで準備してきたっていうのが、ちょっとここはあったんでね。だからそういう意味じゃ落選した後、すぐに亡くなったけどね。やっぱり気力が衰えれば。ただ中田さんは俺も最初、見たとき、やけにかっこいい人だなって、それは本当、感じたんだけど、ただあの人は職員を信用してないんだよね。

南 そうなんですよ。そこが一番。

Cー 政治として外に向けての発言はすごいまいんだけど、行政の中でそれを着実に推進していくことに対してのエネルギーはほとんど持ってなかったんだね。だから、別の言い方をすれば横浜に対する愛着が残ってなかった、国に戻りたい。

南 そうなんです。それしかなかったんですね。

Cー だからやろうとしたことと、やり方の、いわばステージがあまりにもむちゃだなんていうのでね。その頃は俺なんかもう区長だったからさ。話しても返ってこないわけだ。

南 分かります。

Cー 彼がいろいろ、それぞれの職場から、ないしは地域からって、そういう提案を求めてますって聞いてはいるんだけど、ほとんど返ってこないわけね。それはみんな、そうなんだよね。だからまちづくり系の組織の連中もみんなそうだったっていう。最悪だったのは博覧会で、本当に横浜市民のための博覧会やるんだったら、あんなめちゃくちゃな博覧会ないわけよ。

南 ひどかったですよね。

Cー 横浜は細郷さんと博覧会やってるから、経験者はいっぱいいるんだよね。市民が何を求めているかって分かって、かつ、この時代に何をすればいいかってそういう議論ができる職員がいるのに、それ入れなくて。素人集団に、自分が連れてきたプランナーを据えて。結局フランス、リヨンから持ってきたり。

Cー 本当に、外向けにはすごいかっこいいんだけどね。中がちゃんとできなかった状態で後半、終わっちゃったかな。だから南、どこで線、引いたのか分からんけどさ。

南 実は市長になって1年ちょっとたったときから、ちょっと私としては、これはまずいな

あとというところは幾つかあったんですよ。

Cー 結局、地元のおばさんたちが途中で見切っちゃったね。国会議員のときは駅前の掃除を朝からやって、それで演説して、そういう地道な形で。それがみんな、カッコいいお兄さんでいて、かつ礼儀正しくて、地域のためにやってくれてってということで周りが集まってっただけでも、途中から変わったね。

南 そうですね。横浜市長をステップに、大臣か総理大臣をめざす戦略を持ったのでしょね。はっきり言えることは、多分、私がいなかったら中田は出なかった可能性が高いし、それから仮に出ても多分、当選しなかったと思うんです。高秀さんにとってみると、南が中田側に付いたっていうのは大変なショックで。

Bー 当たり前だよ。

ー そりゃそうだよ。

南 これはもう本当、悔いても悔い足りないぐらいなんですけど。結局、最後で分かったのは、彼は先ほど言ったことなんですけど、横浜をどうしたいじゃなくて自分が大臣、総理大臣。大臣じゃないんですよ、総理大臣になりたい。

Cー そう言ってたよ。

南 それだけなのですね。そのために名を売るということで。最初のうちは新聞、テレビに出ることで、横浜の改革がクローズアップされ、自分自身でも少し貢献したと思ったんですが。後の行動原理を見ると全て、新聞の1面か2面に載ることしか関心がない。つまり地方版に載るなんていうのは、意味ないんです、彼にとってみると。これはもう全国版の1面か2面、あるいは社会面ですよ。

それからテレビに出ることに異常な熱意を持ってましたね。当時、桂文珍の『ウェイクアップ』だったかな、大阪での生番組で月1回、土曜日の朝なんですけど、絶対に欠かさないですよ、何があっても。前日の夜、入って、必ずその番組に出る。とにかく映ることに関してはもう全て演出したっていう。

Dー 『なんでも鑑定団』とかそういうバラエティー。

南 そう。何でもいいんですよ。だからあのとき分かったのは、政治家と芸能人は露出が商売なんだなというのが分かった。

一 橋下は？

南 橋下徹？

南 いや、彼はちょっと違うんですね。

遠藤 ちょっと違う？

南 うん。

C一 まだ自分のこと知ってるから、はっきり言って倫理的にしっかりしてると思う。

南 引くところ引いてるから、彼は。だって彼の力ですと事によったら総理大臣になるかもしれないんですよ、演出の仕方によってとか。中田は演出は徹底してたなっていう感じはしますよね。『5兆円の借金』のキャンペーンも先ほど触れましたが。

C一 下水と交通は大きかった。

南 だって交通は地下鉄建設で。それから下水が確か1兆2000億か。下水は後発組で下水道、無理やりすすめたので、それは当然あるんですよ。だから「これはインターネットで全部、公表されてることだし、誰が調べても分かることだし」っていうことを言って、これは借金じゃないんだよ、実は、ちゃんと料金で返すものなんだから、建前から言えば。確かに借りた金額からすれば、大きいけどと説明した。でも彼は「南さん、それだよ」っていう。だから結局、いろいろあら探しをしてみて、何にもなくて、結果的に数字の魔力というところに彼はそこ、独特の感覚なんでしょうね。

C一 これはきいたよね。

南 彼は「選挙戦で、5兆円の借金の連帯保証人の皆さん」という第一声なんですよ。これもすごいですよね。選挙活動も演説の場所に2、3、行ったんですよ。いろいろ取り巻きがいてですね。東戸塚だったかな、駅前のそこへ寄ったら選挙カーの上で演説しているのに、周りの市民は20人もいるかないかなんですよ。そこでとうとうと20分、30分、演説やってる。なんかもったいないな、こんな時間ってと思ったのですが、結局、彼はしゃべってる相手は、20人の市民じゃなくて、選挙カーの横浜で取材しているマスコミの人間にしゃべってるんですよ。それが翌日ニュースになり、あるいはテレビに出るんですよ、選挙期間

中ってのは。横浜は大きな都市ですから。彼はそれを狙っていた。やっぱり選挙に関してはプロなんだなというところですね。

それからその『5兆円』も心配になっちゃって、あまりにも言ってるので。「中田さん、そんな5兆円ばかり言ってたって別に返せる当てもないから、万が一、市長に当選したとしてもこれ、逆に自分の首、絞めちゃうから心配なんだけど」って言ったら、「そんなの分かってんだけどね、でも今はキャンペーンなんだよ」って言うんですよ。この2週間っていうキャンペーンをどう勝ち抜くかっていうのが今の最大の課題であって、使える限りこれ使うんだっていうところですね。

―― 政治家か。

南 政治家は、感覚、違うなと思いましたね。

Bー そうというのはやっぱり松下政経塾なんですかね、あれ。

南 多分そうだと思います。結局、彼の失敗要因は幾つかあるけど、松下政経塾の人脈をたどって副市長に女性を呼んできたっていうのも、とんでもなかった。

Bー そうだったね。

南 彼女は学会では評価されてたんですよ、子育てどうのこうの。それで本、書いたりとか。政経塾ってああいう体質なんですね。全て、自分が、というスタンスを育てる・・・。

Bー 感じだね。

南 会った人、全員がみんなそうなんです。他人はともかく自分がどう目立ち、どうポジションを取るかっていうことだけを考えると。

Cー でも組織に戻らないんだよね。それで何、うまく、それでだまくらかされちゃったわけ、あなた？

南 私はそうです。それが不徳の致すところ。

Eー 私なんか民間の会社でいて、ちょうど定年退職の後、中田さんが市長になって、最初は非常に感動したのが、時代認識っていうのを一番、強調したんですね。確かにそうだと、時代は変わるんだと、最初のうちはだから中田さんってすごいなあと思ったんですけど、最

後はさっき、おっしゃったように全くそれも無責任な辞め方してがっかりしました。

南 確かにだまされちゃったと、いうところですか。彼にとって、横浜市政は自分の地位をつくるための手段にしか過ぎないのですよね。私も役人の端くれだったので世の中の動きについて、真面目には考えている部分もかなりあったつもりなんですね。時代の認識だとか課題だとかはほとんど合うんです。一番合うなと思ったのは、高秀さんはプロですから行政主導型なんですよ。市民参加には懐疑的な部分があった。それは市民を信頼しないじゃなくて、市民の意見を受け入れる必要性はあるけれど、どのように制度化するのか、という点です。

「市民の代表だといったって、選挙を経てない人がどうして代表になるのか。町内会長さんが権限を持っているけど、その根拠は何なのか」と言っていました。一方で、行政の人間がプロとして、専門性をもち、責任を持ってやんなきゃいけないんだっていう行政主導型の発想、自負は非常に強かったんですね。時代の変化を感じつつも。

でも中田宏の場合には、これからの行政は、コーディネート役に徹して、民の力を活かす。小泉純一郎と近いところだったんですけど。私自身も、行政主導の限界は感じていました。役所の中だと縦割りだし、発想にも限界があるし、お付き合いの幅も要するに大体9割の役人はその職場、あるいは知人の中で動いてるわけで、外に出てく人はあんまりいなかったのが実態です。私は逆に、もっぱら外のひとを中心に付き合っていた人間だったので、その辺で中田とは、表向きの接点の9割はほぼ一致した、と感じたのが、だまされた原因なんですね。要するに目的が全然、違うわけですよね。自分の権力のためにことばを使うということと、そもそもそういった社会を目指すというのは全然、違う。

一致するんですけど、実はもうちょっと行くと完全に分かれんですけどね。その一致したところで、言い分けですけどね、それを見なきゃいけなかったのでしょうか。残念ながら、裏切られて痛い目に遭うまでは分からなかったというところでした。

B- それは、南さんは政治家じゃなかった。

南 そうですね。政治家ではないですね、完全に。

A- それからどうしたんですって。

南 中田のいろんな発想や行動を見ると、2年間ぐらいは中田市政は改革の方向で動いている印象だった。ニュースになるってものは、職員にやらせて、自分の成果として発表するっていうところなんですね。ただ私が一番、気になったのは論功行賞をやらなかった。つまり改革とか、新しいことやるって、ものすごく疲れるのですよね、既得権益を打ち破らなければならないから。でも、その改革をした職員たちが全然、報われないんですよ。大体ニュースになった人がその後どうなったかっていうと、昇任して良いポジションに付いたわけでもな

いし、そのままの人もあるし。逆に言うと旧来型って、私が一番、嫌いな官僚型っていうのかな、村役場型の官僚の人たちがどんどん出世するのが見えるとかね。さらに、一番の問題は不祥事が起こった場合に、職員を信用してないので、徹底的に公表して処分しようという方針なのです。だから毎日、横浜市政の記者クラブの中にはいっぱい不祥事件のネタが積まれるようになったというふうに聞いたんですよ。実際には見てないですけど。こんな対応をやったら、市役所の職員がせつかくやった苦勞が報われないな。一方でミスした場合には徹底的にやられる。しかもミスした人間だけじゃなくて、それを発表する人間、処分する幹部職員は、1週間ぐらい、それに掛かりきりになるんですね。類似事例はどこにあるのかとか、どの処分がふさわしいのか、その後始末だとか、どういう発表の文書を作るとか。仕事は停滞するし、士気はさがるし。

だけど表向きには素晴らしいことが市長の発表で新聞に、テレビに出て。テレビなんて特集が何回も組まれましたよね。

Cー 2期目の選挙結果はすごかったね。

南 2期目、83万票という一期目の倍の得票を取ったのですが、翌月からガラッと変わりました。これはいろんな説があるのですが、有力なのは、ある市議が自分の手の上で動かしたくて、政治資金規正法と公職選挙法の問題が起こったのを利用した。町田市長選挙に出た幹部が市を退職するときに、幹部職員がお金を集めて、政治資金パーティーにして届けた。ここまでは政治資金法でよかったのですが、その集め方のときに庁内のメールを使って、当時の市長室長が「所属でまとめて」ということをやったのが公職選挙法で禁止されている公務員の地位利用だろうと。最初からこれ、おかしいんじゃないの、というような議論があったのだけど、それが全然、伝わらなかった。結果的にその市長室長は残念ながら罪をかぶって、自ら命を絶ったっていうようなこともあったので、非常にじくじたる思いなんですけど。

そんなようなことがあって、2期目、当選した途端に仕事ができなくなったのです。だって幹部200人が県警に呼ばれたのですから、県警に半年間、取り調べで。

Cー だって助役まで含めて文書、回ってこないからね、それはむちゃだってさ。

南 誰も分かんない。

Cー 僕なんか彼とは同期だから、「町田市長選に出るので辞める」っていうから、仲間と励まそうと話してたら突然。

南 メールが。

Cー メールでき。確かに当時、中田さんは彼とコンビを組んでたから。個人の餞別だったらよかったわけ。それを役所の中で市長と彼をセットで応援するみたいなね。止めなきゃいけないなかった。

南 そうですね。

Cー だから総務部長から「これ、やばいですよ」って言われてさ。餞別だけは同期だから1万円ぐらい、それ出して、彼には、これやばいぞと、役所の名前でやるのは止めたほういいぞってメール送っといたんだよね。でも結局、お金を出した連中も全部、引っ張られてさ。やっぱり所轄に呼ばれて、呼び出されたら2時間から3時間やられるわけよ。だってメール全部、行ってんだから。だから、あなたはこういうメールに対してこういうふうに答えて、かつお金を出して、会に出席したやつはその会の中でどういう意見がありましたか、から、どういう方が出てましたか、全部、聞かれるからね。俺なんか、あなたは分かっているのになんでやるんですかとか聞かれた。でも同期だとみんな局長クラスなんだよね。

ー 副市長から来ちゃえば、当時の組織の流れにいたやつがいれば、ほとんどみんな。大体それは、他は幹部なんだから。

Cー それで結局、これらはまとめて処分されるんだけどね。じゃあ市長はどうなんだよって。市長、何もないんだよ。

Cー いや、だから市長もいろいろヒアリングされたんだよ。あなたが指示したんですかっていう話をね。でも、いや、私はやってない、とでも言ったのかな。

Cー してません。だからやってんのは誰だって。結局、あのときの形では副市長がまとめ役をやってるっていう形になっちゃんだけどさ。だけど選挙は法律からどこまでが許されて、どこまでが許されないってもう、やっぱりそれは公務員の基本なんだよな、法律だから。議員だってしょっちゅう捕まってるし、選挙運動やったやつだって捕まってるし。それを分かっててああいうむちゃをやっちゃったんだよ。

遠藤 その頃って、部長級、局長級の方が退職されるときに、餞別みたいなもの集めてませんでした？

南 もう伝統的にずーっとやってましたよ。

遠藤 やってましたよね。

C－ だから、ただ餞別だけで、別に政治的な意図はなかった。

C－ そうなの、でも選挙で立候補したもんだからさ。

遠藤 選挙と重なってるんだ。

C－ そう。

南 餞別は、「記念品代」として定額を徴収してたのですよね。

遠藤 記念品代、集めてましたね。

南 記念品って別に記念品じゃなくても現金でお渡しするのがほとんどなんですね。それがたまたま町田市市長の場合も、港北区長を辞めて町田市市長選。だったら、市長選挙に出んだったら、これは政治資金パーティーにしようっていうところまではよかったですよ。それだったら別に。ところがその集め方なんですよ。

遠藤 あれから止めたんですね、記念品代、集めんの。

C－ そう。

南 それは止めるでしょうね。

遠藤 選挙に関係なくても止めてましたよね。

南 そんなようなことで結局、中田は2期目からは一切、仕事ができないし、しなかった。

C－ そうだね。

南 できないし、しなかったですね。結果として、彼は政治家ですからすぐ、頭を切り替えて、横浜市市長は2009年7月に、任期を8ヶ月残して辞めるわけです。その年は、7月に衆議院の解散があつて、8月に衆議院選挙（総選挙）になった。中田は、辞める理由として「総選挙と一緒に市長選挙をすれば、選挙費用は10億円浮くし、党派選挙と一緒になので変な野合もなくなるし（中田は「オール与党体制」を批判してきた）、この時期なら新しい市長には次の年度の予算を組んでもらえるので、潔く私はここで辞職をします」ときれいごと

を言ったのです。これは嘘です。ひどいやつだなあと思ったのは辞職表明をして2週間後に、私の携帯電話への連絡で、「南さん、お世話になりました。今回、辞職をしたのは、前から言ったように私は2期、8年を限度とて言ってきたので辞職しました」と一方的に話し始めるのです。まず、2期8年って一言も言ってないんですよ。当初から。初当選後の施政方針演説の準備のときに私がチームで入っているんなアドバイスしました。

そのときに「3期、12年を限度ということを入れたら？」って言ったら、彼は「3期12年で遠藤を切るってことは、遠藤が見えたときにレームダック状態になるから、3期12年を超えないようになっていうようなスタンスで、辞めるとは言わないように表現を和らげたんです。だから2期、8年なんて一言も言ってないです。なのに、電話で、一番、近くにいてよく事情を知ってる人間に、よくしゃあしゃあと。だから、「あんた、何、考えてんのよ。あんたのおかげで大変なことだよ、こっちも」と言ったら、「それは見解の相違でしょうね」ってパッと電話、切りました。そして、次の年の参議院選挙に新党を立ち上げて出たのです。多分、横浜市長選挙で83万票、取ったから、市内で10万票はいくだろうと皮算用をしたのではないのでしょうか。それに上積みすれば比例代表で議席はとれるだろうと。ところが、横浜市民は馬鹿ではありません。横浜市内でとれたのはたったの1万3000票なんですよ。横浜市民はよく分かってたな、というところはありませんね。

でも、この物語は、参議院選挙だけではなかった。市長を辞める半年前くらいから、彼は、横浜市長に興味がなくなって、東京都知事を狙うことを考えていたのです。その頃、都知事選っていう話しは、表向きには全く話題になっていなかった。石原慎太郎が知事であるので、現職で。でも、政界の一部に東京オリンピックの誘致に失敗し、それから新銀行東京のプランが破綻したこともあり、もともと、週に2日、3日ぐらいしか登庁していないんだから、多分、嫌になって都知事を投げるに違いないと、いう話があったのです。恐らく石原慎太郎はあと半年以内で辞める可能性が高いねって。つまりその辞めたときに、中田は、ある政治家と組んで、正副都知事候補ということで、アメリカ大統領選挙のように正副をセットにして、都知事選に出ようとしていたのです。

もちろん、都知事選は、石原慎太郎が辞めるかどうかによって左右されるので、辞めない場合は翌年2010年に参議院選挙があるので、参議院選挙に日本創新党って新しい政党をつかって、そこで出ようと。二段構えだったのです。

だから中田宏は、2期8年で辞め、選挙費用を節約し（横浜市の財政負担を減らし）、後任の市長の裁量を十分に発揮していただく、というきれい事を言ってましたが、実のところは、横浜市のことはあきらめて、最低でも、国会議員として国政に復帰したいと考えた。もともと、横浜市長をステップにして、大臣、総理大臣を目指すという戦略ですから。多分11月かそのあたりに石原慎太郎が辞めんじゃないのっていううわさがあったんですよ。

このような体験をしたので、政治家っていうのは、特に衆議院議員の小選挙区に出馬する人は、基本的には大臣、総理大臣を目指す。つまり、「権力」を目指していると解釈しています。地方議員とは、同じ政治家でも、目指すゴールが違う。中田宏は一時期、「維新の党」

の枠で北陸信越比例で一回、衆議院議員に返り咲いのですが、比例っていうのは脇なので、小選挙区を目指した。横浜で駄目だったので、かつて、中選挙区の際に神奈川1区だった川崎市内の選挙区で出た。でも、川崎でも負けた。大臣になってうれしくなって失言、暴言で辞職する政治家が多いのですが、彼らのゴールは大臣だから、なった途端に嬉しくて気が緩むのでしょう。国会議員を目指す政治家は、彼らにとってみると権力の象徴である大臣、総理大臣になるってことが目標なんでしょう。

従って市政というのの中でも、結局、権力を握るっていうことに価値があるし、その中で自分をどう演出するかっていうところでしょうか。中田を見ると、もともとは衆議員をやった政治家ですから、その自治体にとっての将来だとか政策っていうのは自分の権力奪取（大臣になる）手段でしかない。ある意味では選挙という洗礼を受けるので、演説もうまい。宣伝の仕方だとか政策の選び方だとか。だから「受け」がいいことは、やるんだっていうところですね。人気取りという観点から。

それに比べると官僚OB型の市長は、細郷さんの時も、高秀さんの時も、それなりの近さにいたので、大変なプライドをお持ちのかたがただなと感じていました。国（省庁）の事務次官を務めた方で、官僚組織の中でのトップですから、全部が分かっているということが大前提なんです。

特に地方行政なんていうのは、これは田村さんから聞いたので、直接細郷さんから聞いたのではないですけど、細郷さんはあるときに「横浜市はミュニシパル（地方自治体）だからアベイラブルな（可能な）仕事だ」というふうに言ったと。アベイラブルって分かりますか。私はそのときに面白い言葉を使うなあと思った。アベイラブル、つまり利用可能、操作可能といったニュアンスで、国と違って、それなりにできるんだよという意識なんです。だから自治体、市町村っていうのは県よりも下だっていう感じで、国に比べれば非常に簡単なもんだと。

だけど高級官僚出身っていうのは、昭和一桁の世代は、世の中の動向と制度・仕組みを熟知していて、先を読むっていうか、先に対して責任を持つことで、鍛えられているから、いい加減な人じゃないわけですよ。そういった意味では長期的な自治体の姿っていうことに対しては、常に気を配ってるし、そこに対して手を打つっていうことはやってきたなあと思います。

その観点からすると、飛鳥田時代は飛鳥田さんの政治性と田村さんのアドミストレイティブっていうか、まちづくりビジョンがうまくマッチしたんだろうなと思うんです。たまたま田村さんがいたから飛鳥田さんも政治家としてうまく動けたかなあと。飛鳥田さんは田村さんにまちづくりに関する権限を与えた。これは田村さんも言ったことですけど「僕は権力うまく使ったんだよ」、という言い方をしていた。重要な土地の購入だとか、大型事業案件だとか、重要な規制は田村さんのハンコ（同意）がないと絶対、前に進めないような権限を、市長があえて与えたと。これは田村さんから聞いた範囲と、周囲の方々の解釈で、直接私が経験したことではないので、多少違っているかもしれないけれど。

中田宏の時には、そのようなブレンがいなかったともいえる。飛鳥田さんは、そのようなブレンを必要として、田村さんを連れてきたけれども、中田は、何もしなかった。その違いは、横浜市政にとって、大きな違いであり、マイナスになった面があるのでしょうか。

Cー 横浜みたいな大都市でいけば市会議員から国（国会議員）に行った方、菅さんもそうなのですが、そういう方は何だかんだ言いながら地域、自分の出身の母体、さっき言った小選挙区、母体のことを相当、意識してる。だから国会で国の関係やりながらも自分の何十パーセントの範囲は秘書を通して確実に情報を集めながら施策をバックアップする。同じ政治家型でも地元出身の「たたき上げ」で育った人はそういう資質がちゃんと残ってるっていいのではないでしょうかね。

これは細郷さんの時代も小此木さんはそういう意味で、みなとみらいの事業をバックアップした。横浜市会議員を経ないで、突然、衆議院議員になった、いわば曖昧な地盤の中から出ちゃった方との違いはちょっと意識してほしいね。

南 それは確かに言えます。

Cー ちょっと聞きたいのは林文子（1964-）さんへのつながり方、どういうふうの評価すりゃいいんだろうね、あれ。僕もよく分かんないんだよ。

南 林市長さんについて、私の聞いた範囲で言うと、中田の失敗の落とし子だなあと。つまり市会の与党筋からいえば、中田に対する恨みが相当あって、自分たちの言うとおりに動く市長が欲しかった。中田の場合には、政治家として市会議員よりも国会議員としての経験を積んでいるので、言動に関する緻密さが市会議員とは違うレベルだった。中田が市長選に立つときに、最初に言ったのは「大体、市会議員なんてけんかの仕方も知らねえよ、あいつらは」と。つまり一寸先は闇という、本当に一瞬も気を抜けない国会の中と比べれば、市会という所は牧歌的な所だと。

Bー 牧歌的ね。

南 だから市長になって一番最初に彼が言ったのは「予算を承認させることだ」ということでした。それなりにうまくやったらいいですよ。だって市会議員で中田を支援したのは5人しかいなかったんですよ、あのとき。残りのほとんどは敵なんですよ。みんな、高秀さんに付いていた。市会議員九十何人いるうちの5人しかいない。でもここで、予算を賛成させるのが最初の関門だと。彼は目標、据えて、それなりの根回しをやって見事、全会一致の賛成になったのですね、予算を。だからそういったところで、なかには市会議員の何人かが、中田の追い落としも画策したってうわさもあるのですが、大部分は中田にしてやられたと

か、あいつはというようなことがすごくあったと思うんですよ。

なので、議会の言うことを聞く人間が次は欲しい。当時、最大の課題は新市庁舎ですね。議会は新市庁舎の建設を、私が入った40年前からずーっと言い続けてますから。議会では、いつも新庁舎のことが質問に出る。すると、そのたびに新庁舎だから「シンチョーニ」にと三役が答弁して、みんなが笑ったりとかね。中田のときも、彼は議会との取引なのか、土地を手当てしたんですけども、建設決定までは行かないんですよ。一番、悲劇だったのは福岡県知事だった亀井光さんで、亀の形をした県警庁舎。それから県庁の屋上には井桁印のソーラーパネル、これは井という字と光るといふ、亀井光というように。まことしやかに噂され、知事公舎のごみ入れが何万円とか、スリッパが何千円とかで、そういうスキャンダル全部やられて、知事選に落っこっちゃったんです、できたときには。だから庁舎っていうのは鬼門なんですよ。

それに対して議会は、自分たちのステータスでこの日本を代表する大都市で、あの古い議会棟と部屋の狭さは何だと。自分たちにふさわしい場所が欲しいっていうのは、常に言い続けてきた。90人以上が、束になって要求しても、誰も責任を取らなくていいわけですよ。決断した市長だけが次の選挙で落っこちる可能性がある。そういった意味では議会の言うことを聞くという人間を誰か探して、何にも分かんない人を探したらたまたま、名が知れている人が浮上した。初めてじゃないですかね、本当に行政関係でもなく政治関係でもなく、単なる知名度だけで市長になっちゃったと。

だけど実情、聞くとひどいものですね。私が聞く限りにおいて、2期目になったってあの市長さんは何も知らないからっていうのは幹部職員の一一致した「評価」ですね。それからもともと体調が悪いので、町内会長をねぎらう会とかいろんな会合はさっさと帰っちゃうと。それから好き嫌いがものすごく激しくて、女性管理職の中では、市長と同じ色のスーツを着たら飛ばされるって何人かの職員から聞いています。真偽のほどはわかりませんが、そのよううわさがまかり通っていたのですね。それから実力に寄らず、自分の眼鏡にかなった人間をどんどん上げていくというか、個人としては別に悪い人じゃないし、みんなの仲間だって言うけど、あれはないでしょっていうのは市役所の職員の声ですね。

カジノの話しもひどいですね。もともと与党筋が推進する方向なので、それに従っていたのに、市長選挙の前は、当選したいので、「白紙」と言い続けて、参議院選挙が終わったら、「推進」ですから。「白紙」から「推進」への説明はないわけです。

Bー 南さんが経験した中で、最初に出会った田村明っていうシティープランナー、その後にシティープランナーらしき人材は、横浜にはいたのか、いなかったのか、いたと思うのか、いないと思うのか。あるいはそういうシティープランナーとそのガバナンス、市長との距離感がたまたま本当に田村明の場合非常にうまくいっていたということは、みんなが認めているのだけど、その後、そういう組み合わせで、市長とプランナーがペアになってやることによって、お互いが補いながらマネジメントがうまくいってくっついてというような仕組みがで

きなかったのか、という観点でのご意見を。

南 残念ながら、それができなかったなあということですね。一つは市役所職員は、多少変わってきましたけど、基本的には採用されて定年までをお勤めする。特に地方の場合はもうこれがほぼ不文律になっているので、内部だけで育った方がトータルなプランナーとして成り立つのかというと、まずその基盤は極めて弱い。基本的に縦割り行政の中で過ごしますから。

だからその面で、田村さんというのは外から来て、たまたまうまく政治家の方とマッチしてきました。その組み合わせで言うとまず市役所職員、横浜市に限らずどこでも、生え抜きの方がそういったプランニングができるかっていうと、私はできないのじゃないかと思います。部分最適はあるのですが。トータルな意味での縦割りを越えたっていうか、全体思考のプランナーっていうのは、内部から生まれる余地はないと思います。

B- もう一つ、せっかくアメリカに2年、留学されて、アメリカのシティマネージャーというのがあるようですが。それは。

南 シティマネージャー制度ですね。

南 私の専攻は、高等教育（大学教育）でしたが、家族と一緒に生活をしていたために、行政制度が日本とは全く違うことを体験し、大変に勉強になりました。その印象から帰国後にアメリカの自治制度を研究し、シティマネージャーという制度が分かりました。州や自治体によって多様なのがアメリカですが、基礎自治体は基本的に住民発議の「自治憲章」で成立します。なので、市町村は面積的には1割、居住者割合は6割で、市町村のない部分が大きいという日本の感覚では理解が難しい。「自治憲章」で制度が決まるので、市長の選任も数名の議員の互選、あるいは、直接選挙など大きく違います。また、税金を効率的に使うという観点から、「小さな行政」を目指し、議会で決めた政策や予算の執行は、議会と契約したシティマネージャー組織が行い、公務員はその支持の下で働くという構造です。

なので、議会あるいは市長と契約した行政経営の専門家集団であるシティマネージャー制度が機能しているのです。その専門家の養成に大学の専門学位が適用されます。

中田市政で、そのシティマネージャー的な機能をどのように果たせるのかという制度的な検討も行おうと思ったのですが、時間的にも、組織的にもその余裕はありませんでした。

F- お話、ありがとうございました。今の横浜市の問題点について、長期的なビジョンがないっていうのがあると思うんですよ。田村さんのときは六大事業があって、その後、細郷市長も高秀市長も「よこはま21世紀プラン」や「ゆめはま2010プラン」とちょっと長めに期間を取ったような。中田市長の時代にはリバイバルプランっていう形になって。

南 中田のリバイバルプランは、行革プランです。

Fー 基本構想があって、4年ごとに中期計画って形になって。それを林市長が踏襲してるわけですけど、実際に横浜として数十年後にどこに行くかっていうのは見えないまま計画を立てている状況だと思うんですけど、そこはどう。

南 それは横浜だけじゃなくてという感じが強いですね。横浜の場合には少なくとも巨大役所なので、私は職員の質がものすごく高いなと思ってます。なぜならば、縦割りの部署が、課の数が800以上もあるんですよ。課というのは役所の基本ですから、そこにいる人間はその守備範囲のことを真剣に考える、それが800にも細分化される、地域の分割もありますけどね。そうすると、しばらくすればその分野のプロになっちゃうんですね。大体異動後1年たったときに、他の自治体に比べると、その分野では相当、知識レベルと経験レベルが高くなる。つまり、専門家集団の集まりってというのが横浜で、でも一方で縦割りがすごく強くなるので、総合性がなかなか発揮できない。他の市町村は何となく、その辺が曖昧です。将来プランといっても今の日本全国、どこもそれは立てらんないのだなあという感じなので、必ずしも横浜だけの話じゃない。

田村さんにしても、細郷さんにしても、高秀さんにしても、どこまで考えたかという、都市の骨格作りというそのものは田村さんの場合、かなり考えたと思うのです。多分50年ぐらいの先を。それ以後は50年を見通した構想をたてるのが困難だった可能性があるなと思うんですよ。少なくとも自分の任期プラス10年ぐらいは見たかもしれないなあと。今の林市政に至ってはゼロですよ。だって一番建設費の高い時期に市庁舎を建設する。そして、市庁舎には、50年先を見通したビジョンが全くない。あれはちょっと考えられないと。しかも、市庁舎を建設することを決めたときの記者会見の報道を見ると、「なんでこの一番、東京オリンピックで工事費が高いときに造るんですか」という問いに、「東京オリンピックが開かれて、世界各国からお客さん来たときにお迎えする場所をつくんなきゃいけない」って言うわけですよ。お迎えする場所は東京であって、横浜じゃないんですけどね。誰が言わせたか知らないですけど、そんなこと平気で言う方なんですよ。だからはっきり言ってこれ、最悪の市長なんだけど、でも中田に比べるとその最悪のレベルが全然、違うというところ。議会与党の代弁者でしかない。なので、中田、林という都市ビジョンのない市長が続いたこと、続かせるきっかけをつくってしまったことには、じくじたる思いですね。

Bー じくじだなあ。

Cー 将来ビジョンの話は結局、一つは人口動向だ。だから飛鳥田さんのときに六大事業を作れたのは、高度成長の人口動向がすごいストレスとして行政にぶつかったり。だからこれ

を解決する、ないしは緩和する施策を作っておかないと、緊急対策だけやってたんじゃ都市として成り立たないっていう、そういう危機意識が時代意識としてあるので、それをベースとして田村さんのいたシンクタンクに、いわば民間に委託して長期ビジョンを出してもらおう。構想としてまとめてもらい、その構想は一応 2000 年を意識はしてるけど、そこまですっぴと行くはずじゃないから。ただ少なくとも人口急増の流れの中で、義務教育（学校）を抱える教育委員会的に言うと大体 10 年、20 年先は予測する。だからそれに合わせたストーリーだけは一応、つくる。

細郷さんと高秀さんの時代は結局、人口が落ち着いてきたんだね。高秀さんのときは逆に下がる傾向が見えてきた。そういう時代に近づいてるから。そのときの長期ビジョンのベースとなる指標を、何をするかっていうのが、自治体単独では難しかった。ただし 5 年は持たないと、これは財政計画の話もあるから、これはもう確実に実施計画（中期計画）はまとめなければならない。でも 20 年を見通してビジョンをつくれって言われたときには、それを受けるコンサルが今いるかっていうと。

南 いらないですね。

Cー ちょっと、そういう意味でのコンサルサイドの力量が今、落ちてきてんだよね。高秀さんの時代まではまだ古い、東大の系統もそうだし、早稲田の関係もそう。主要な大学の研究室を中心に、外に出てった、都市計画、ないしは都市開発やる人たちの集団がいたけど、今そういう時代じゃなくなっちゃったからね。ちょっと俺も、だから浮かばないね。こういう方に頼めば長期ビジョン出してもらえるかなっていうと、難しいね、今ね。

遠藤 南さんは何かありますか？

南 いや、私は当面の課題を追うのが精一杯です。子育てを何とか、とか。

南 私の場合、現在は、公共施設の老朽化をどうするかっていうところから始まっているんですけどね。総務省が老朽化した施設を、公共施設とインフラと一緒に長期ビジョン立てると、自治体に要請してますけど、無理なことを言ってるなって。誰がそんなもの立てられるのっていう。だって財源の見通しも全然ないしね。そもそも公共施設、どう運営されているのかも分かってないっていう中で、日本全国ではみんな一生懸命、計画作りやるんですよ。実践（プロジェクト）を想定した計画はほとんどありません。机上の「紙」ベースの計画書ばかりです。

だから、「15 年から 20 年の計画の時代はもう終わってんだから、50 年後を想定したビジョンの時代にしたらいかがですか」と。例えば子育てだけを一生懸命、頑張りますとか、緑をちゃんと育成しますだとか、産業育成を図りますだとか、実現するかしないかは分かん

ないですよ。だけど少なくとも共通項として、自分の街をどういうふうに位置付けるのか、その姿、ビジョンは描くべき。それは多分 40、50 年かかるのかもしれない。それは議論したほうがいいんですよ。

C- それはトップにいる市長の能力にかかっている。

南 おっしゃるとおりです。

C- 細郷さんも高秀さんも、細郷さんは事務系のエースから、高秀さんは技術系から。でもあの 2 人はそれぞれ技術系についても福祉系についても、全部、自分で勉強してるわけだよ。だから市長になってからの勉強量が生半可じゃないんですよ。だからそれは南もよく知ってると思う。高秀さんはすごい本の読み方するしさ。

南 すごいですよ、もう。一晩に 3 冊とか。

遠藤 読んじゃうんだ。

C- 高秀市長の 1 期目は技術系のチームは知ってるところがあるし、市長の真剣な形に当然、応えて議論してっただけ。福祉の連中は抵抗したみたいね。

C- でも本人は集中的な勉強をしていた。かつての国の役人は、そのようなトレーニングをやってるから、だから生半可じゃないんだよ。今の役人は人事を官邸に握られて「忖度」優先だけ。

南 その官僚なんですけど、昭和 1 桁なんですよね。つまり城山三郎の『官僚たちの夏』の時代を生きた人たちだからそれができたし、やった、使命を持ってね。今の官僚はどうかというの、今年、『官僚たちの冬』っていう新書を元財務省の人間が書いたのですが、まさに忖度ばかりで。データに基づいて政策の検証をしないっていうんですよ。政治のほうにおもねって、政権の顔色をうかがい、首相が新しいことを思いついたら、その裏付けの資料、簡単に集めてぽっと出すだけ。それがどう展開したのかという検証が一切ないわけで、これはちょっと中央官僚としてはどうしようもないな。

A- あれ、南さん、結構、網羅的に俯瞰してくれてはいるけれども、一応ここ、NPO 法人は田村研究会でございますので。

南 そうなんです。そこをね。

Aー そういう辺りから言うと、その後の市長の流れの中で田村さんのまちづくりの遺産というのは、どういうふうに扱われて、どういうふうになったんでしょうかという質問にはどう答えますかね。

南 少なくとも細郷さんは、特にみなとみらいに関してかなり実質的なところで、戦略をくんでやったんだろうな。高秀さんは残念ながら、そこがなかったなと思うんですよ。田村イズムの中の延長線上では捉えられないっていうか。だからみなとみらいで何をやったかっていうのは、それは私の狭い情報収集の範囲ですけど、三菱重工に「早めにビル建ててくれ」と言ったとか、国立会議場にステンドグラスを作ったとか。だからみなとみらい全体にとってみると、部分部分にはいろんなことやったんですけど、残念ながらそこが、高秀さんっていうのは次の一手がなかなか打てなかったんじゃないかな。ドーム球場を建設する意向だったと聞いていますが。これはもう時代的に開発があらかたできちゃって、完全に下降線をたどる経済状況の中で何をやるかっていうと、それはちょっともう昭和 1 桁の発想の中では収まらない。

Cー 俺はちょっと違うと思う。

南 違う？

Cー 細郷さんは今、言ったみなとみらい開発だけじゃなくて、交通ネット、交通アクセスの改善も相当、意識していた。道路の環状 2 号線なんて、細郷さんが本気でやったから、あのスピードでできたんだよね。戸塚や鶴見の副都心機能。いわばその基軸としてのみなとみらい開発をやった。その背景となっている横浜の広大な郊外地域に、アクセスとして再整理するっていうことも並行してあの方はやったと思いますね。

高秀さんの時代は何をやったかっていうと、高秀さんの時代に出てきたのは、細郷さんがさっき言った「サミットをやりたい」って言ったのと似たような意味で、みなとみらいのソフトのパワーを発揮することによって企業誘致に力を入れた。だからそれがワールドカップになってくるわけ。あのワールドカップの話を、国体用に国際競技場ができた時に、W 杯の決勝戦を想定して、観客席を増やし、新横浜を一つの拠点にしく発想があった。何を背景としてあそこに都市活性化をするかっていうときに、環状 2 号線ができて初めてつながった。それまで横浜線 1 本しかなかったですからね。新幹線と横浜線で何ていう町だ、区画整備をやったけど水道計画を入れてない区画整理していた。いわば用途地域は商業系にしてあるけれども、はっきり言えば企業立地できない土地として残ってたわけね。それをもう一回やり直すってことで道路系統、それから土地利用としてあそこに競技場と総合病院。総合病院っていう国際的な機能ももたせた。

Cー そういう意味で競技場と総合病院があつて、ホテルを造つて、新幹線も街として都心とのアクセスも開通したつてということによって出てきたのが IT 企業。関内に出てくるよりは自由な場所だから、新しいオフィス、いわばソフトが使える場所に仕立てた。一つの新しい街の仕掛けができたつていう意味で行くと連続性としてはあつて、最大に頑張つたのは東横線の地下化。あれもはっきり言えばすごい借金なんだけれども。でも細郷さんと高秀さんがそれぞれ頑張つたのは、ハードもやつたけれども表にあんまし出てこない相当、金のかかる基盤系をあえてやつたつていうのが資産になっている。

ソフトはこれまた介護保険の話とかいろいろあつて、もう本当、大変な時代をよく 2 人はしのいだなど。僕なんか福祉系はよく分かんないけど。

Cー 人脈も大きかつた。細郷さんの人脈もすごかつたけど、高秀さんの人脈もすごかつた。トップの方は勉強しようと思つたら、すごい人脈ができるわけね、権力も含めて。でも勉強しなと、もう本当それっきりなんだよね。

南 中田の人脈は政治がらみかな。ただ中田の一番、最大の功績は日産の誘致だと思うんですよ。

Cー あれはね。

南 あれは確かによくやつたんですね。全役員に自筆で手紙を書いて、もちろん彼がやんなくても事によつたら来たかもしれないけど、だけどあれは相当の働き掛けで、日産が来たことによつてみなとみらいはうまく回転し始めたつていうのはあるので。

もともと、子安に工場があつて、本社は銀座に移つて。銀座もいっぱいになってるので、どっかに移転しなきゃいけないつていうことだけど、当然、日本人だったらそれは絶対、東京なんですよ。だからカルロス・ゴーンという外国人が来たからつていうか、日本の常識じゃない人だから。そこにたまたま狙いを定めて、みなとみらいつていう所をアピールした。実際、住んでみると国際的な企業にとって最高の立地なんですよ、だって羽田空港と新横浜と東京駅と渋谷に、40 分で着いちゃうんですよ。これ、東京都心部で全部かなえられないですよ、実は。これがすごく大きな立地メリット。

そういった意味では日産は非常にいい場所を取つたなあという。

遠藤 すいません。面白い話のついでに。東京一極集中つていうのと、南さんから見ると、地方のまちに行かれてるみたいですけど、どうやって頑張れつて言つてるんですか。

南 頑張れつて。人口の維持ですか。

遠藤 まちの持続性。

南 はっきりしていて、もうどうにもならないですよ、展望がないですよ。人口減少傾向には歯止めがかからない。

遠藤 私なんかから見ると展望もないような気がすんだけど、だけどやっぱり、そのことで諦めちゃいけないと思ってんですけど。

南 ただ言えるのは、国の方針で、議員定数の維持、交付金の維持、合併特例債という財源という「アメ」に期待して、合併しちゃった所は大変な困難に直面している。地域の自立、とうい、自立はできないのですが、人口の維持を徹底的に議論して考えている自治体は、生き残りの展望を見だしつつあります。国に頼っているところは、完全にじり貧です。何とかしたいという意欲をもつ住民や公務員がいますので、地方の場合は市役所、町役場の中の1人、2人がはっきりした人間がいて、首長がそういったことを承認するっていうんですか、側面からでもささえると劇的に変わるんですよ。

遠藤 それはありそう。

南 完全な成功例と言えないんですけど、岩手県の紫波町という街は人口3万3000人でオガールプロジェクトとして駅前開発をやって、年間90万人、集めちゃうわけね。その仕掛けはすごいんですよ、いろんな意味で。そこだけではなく、まちづくりの中では小さな地方の都市って結構やってんですけど。でもそれが全国の1780ある自治体の1パーセントもないんですよ。あとはもうみんな国に頼ってとか、座して死を待つ所ばかりで、なかなか展望が出ない。特に首長がひどい。議会はもっとひどいですよ。

遠藤 静的な首長さんとか議員さん、従来型の制度に安住しているっていうのは何もできないなあって感じがするんですよ。どうしたら救われんのかあと思うんですよ。

南 私も分かんないですけど、イタリアの『小さな村の物語』って、日曜のBSの番組があります。100回以上の継続番組です。それを見てると、高齢化社会でどうにもなりそうもない村ばかりなんだけど、それなりにみんな幸せっていうか、そこそこで生きてるわけですよ。人口は数百人とか1000人とかそんな村がいっぱいあって。

遠藤 ちっちゃいですね。

南 実際にイタリアに行ってみて、あるいはフランスの田舎に行くとそんな所ばかりなんですよ。あれ、生き残ってる、何で、と思いました。だって商店もなければ学校も見えないですよ。教育っていうの、どうやってんのかなと。あれはちょっと研究する必要があるなと思ってるのですよ、これからの日本の姿を見ると。大都会はほっといても何とかなっちゃうっていうか、相対的にはですよ。本当はどうしようもないんですけど。だからちょっとヨーロッパの小さな町や村をもっと研究すべきだと。

アメリカも、市や町は面積的には全国土の1割しかない。住んでいる人も6割、その他は市、町に住んでない。つまり自治市、自治町なんですよ。自治体の憲章っていうのを自分たちで、住民が採択して、シティーマネジャーっていうプロ集団を雇ってアドミニストレーション任せて、少し上澄みの市税、納めて、納められない人は去っていくという自治制度を持ってる。そんなような所だから生き延びられるっていうか。年に一つぐらい自治体が破産するらしいですよ。市が地図上なくなっちゃう。だけどそんなような中で結構、生き延びているのだと。ヨーロッパの場合には伝統的に城壁に囲まれた町だとか、何百人の町、村が残っているので、もうちょっとあの辺、勉強すると日本の生き残る道ってどっかにありそうだなあという感じはするんですけどね。

遠藤 ここにいる人は多分、見ないんだろうけど、50年、100年たつとそうやって消滅する町っていうのはあり得ると思うんですよ。

南 自治体という行政区域としては消滅すんだけど、人間として、住んでいる人間は消滅しないっていうのは今、言われていることで。住んでいる人間、消滅しない人間に対してどうするのっていうのは、合併とかそういう技術的なことではなくて、住んでいる人間に対してどういうサポートをしてくんのですかねという。

遠藤 そう思うんですよ。

南 平成の合併は完璧に失敗した。ひどいものですよ、地方に行くと。あんなひどいこと、よくやったと思う。組織的な合併よりも、業務提携方式で連携して、基礎的な市町村の枠を残した方が良かったと思っています。そのなかで、プランナーをどのように活用するか。ビジョンとプランナーという専門家の養成が必要ですが、展望は小さいという実感です。田村さんのようなプランナーと、真面目に自分のまちを良くしようと考え決断する政治家市長が必要なのですが、なかなか難しい。

(了)